

誌上行学講習会 高佐日焯上人

(I)の判断、これは良いか悪いか、得か損か、是非か、やるべきかやらざるべきか、どちらかにもを決めるときにすることであるが、やはりこれも頭脳味噌(心)が考えてくれる。分別(ものを正しく見さだめる)考量(考える)決定(はつきり決める)。決定というのですから主人公がやりそうにおもいます。実は頭が決めて主人公に持って来るのであります。分別は是非善悪の区別のこと。考量といふのは考え量ること。これらはすべて心そのものが自動的に行なっているのです。三構想。これは物を考えることであつて、その中には創意、着眼、想像という三面があります。これも頭がやるわけであり、創意とは今まで誰も気がつかなかつたことに気がつくこと。例えばニュートンがリンゴの落ちるのを見て万有引力に気がついた。誰でもそれは見ていたが気がつかなかつた。ニュートンは創意をこらしたわけであり、ワットが蒸気機関車を発明したのはヤカンのふたを蒸気がもち上げてくる姿からであるといわれます。これも創意であります。着眼とは眼のつけどころ。紀の国屋文左衛門。その年は風が吹き海が荒れそうである。当然ミカンが入らない。値段が上がる。そこで文左衛門はミカンを仕入れられもうかる。そこで大冒険をしてミカン船を江戸へくりこませて大もうけをした。これは着眼が良いといふべきであります。(以下次号)

お題目で成仏する VII

釈尊は、肉体我から生ずる思考や世界観からの脱却の為の三法印と言ふ基本的教え、理念を説いた。すなわち、次の三つである。

一、諸行無常 (しよぎようむじよう)

この世に生起するあらゆる現象は、常に変化し、流転してやむことなく、移り変わっていく。

二、諸法無我 (しよぼうむが)

いかなる存在も、永遠不変の実体などはない。したがって、肉体我の所用とはならず、執着すべきではない。自分と思い込んでいるこの肉体我も肉体の脳を中心とする意識と、真我意識との合成されたものであり、心とすべし。とらえられべき実体でない。世の中、縁に依つて仮に合成し組み合わされてたものであり(縁起)、実は刹那ことに生まれ滅したりしない(刹那無常)、我がものというものは何一つないといふのが「諸法無我」。

涅槃寂靜 (ねはんじやくじよう) 寂滅為楽 (じやくめついらく)

涅槃寂靜とは煩惱の炎が吹き消された状態、安らぎ、悟りの境地をしめす。「諸行無常」、「諸法無我」の教えによつて、人間の心から肉体的自我心が空と觀じられ、貪りと怒りと愚痴が消滅すると、そこに涅槃寂靜の境地が生まれる。釈迦牟尼仏の仏教は涅槃寂靜に到達することを目標としていた。

以上のように三法印に代表される釈尊の教えは、肉体我の否定、肉體我の存在する世界の否定、肉体我の有する価値観、思想の否定を通じて、自分とその存在する世界への一切の執着を断つて、自分と世界との脱却の観照者である永遠の認識主体である。己と世界の観照者である永遠の認識主体である。